

直売所を核とした複合施設経営で地域経済を活性化

ＪＡあいち知多

主事研究員 木村俊文

1 ＪＡあいち知多と農業生産

ＪＡあいち知多は、2000年4月に知多、東知多、西知多の3ＪＡが合併して発足した。愛知県西部、名古屋市の南に広がる知多半島全域の5市5町を管内とし、名古屋南部の工業地帯や中部国際空港セントレアなど都市化が進んだ地域を抱える一方、海と緑が広がる農村地域も多く残されている。

管内ではタマネギ、キャベツ、馬鈴薯などの重量野菜の生産が盛んだが、これらの野菜は値動きが激しい上に労働負担が大きいこともあり、生産者の高齢化が進むにつれて不耕作地が拡大した。このため重量野菜の単品大量生産を一部改め、ハウレン草などの軟弱野菜を中心とした多品目少量生産に切り替えることによって、高齢者であっても安定的に農業が続けられるよう、地域の農業生産を再編することが急務となった。

こうしたことから、ＪＡあいち知多では2000年12月、地域の消費者へ新鮮な農産物を販売する直売所を核とした「ＪＡあぐりタウン・げんきの郷」を開設した。

2 都市と農村の交流拠点

同施設は、大府市の丘陵地帯にあり、愛知県が整備した大規模なスポーツ・レクリエーション施設「あいち健康の森公園」に隣接する。げんきの郷の敷地面積は5.3haあり、駐車場は約400台を収容可能。ＪＡあいち知多の全額出資による「株式会社げんきの郷」が経営主体となっている。



ＪＡあぐりタウン「げんきの郷」

施設内には、中核となる農産物の直売所(ファーマーズマーケット)のほか、家庭菜園・ガーデニング用の野菜苗や花苗などを直売するグリーンセンター、パンやアイス、豆腐、惣菜などの加工販売施設、地元の食材を使った料理を提供するレストラン、天然温泉、農畜産物加工施設、広場、学習施設などが併設されている。

年間200万人以上の来客があり、開設以来、来客数は安定的に推移している。中国産ギョウザ問題が発覚した08年2～3月には、中国産野菜を敬遠し地元農産物を買いたい客の動きから、来客数が急増したこともあった。07年度の取扱実績は全体で37億5,700万円。このうち過半を占めるファーマーズマーケットの売上が19億4,100万円(前年比+2.7%)と、グリーンセンターの3億6,200万円(同+6.8%)とともに、売上記録を更新する盛況ぶりとなった。収益面でも柱となっているこれら直売所は、生産者の名前が記された野菜や加工食品、

花きなどを取り揃えている。

直売所への出荷組織は、10地域で727名が参加し、果樹部会や切花部会など14の作物別部会で構成されている。年齢は60～70歳代が中心で、出荷額は100～500万円が大多数だが、なかにはパートタイマーを使って年間3,000万円以上出荷する人もある。また、これら出荷者は、生産履歴の記帳、残留農薬検査、加工品の細菌検査等を個々に実施するなど良質品の出荷に努めている。さらに、08年度からは売上代金の1%を原資とする安全対策基金を創設し、出荷者とげんきの郷とが一体となって一層の安全対策に取り組むこととなった。

このほか、げんきの郷では生産者出荷組織と協力して、米づくり体験や各種野菜の収穫体験など、都市と農村の交流を目指したイベントを毎年開催している。また、食と農と健康について学ぶ学習・研修施設では、家庭菜園塾やガーデニング講座、親子料理教室のほか、新規就農者向け農業研修も行っている。

3 成功要因と今後の課題

げんきの郷の利用者の地域分布を見ると、商圈は施設を中心に半径10km圏内であるが、名古屋市中心部からでも高速道路を使えば30分程度で行くことができ、実際に同市内からの利用者が5分の1近くを占める。こうした交通アクセスの良さに加えて、前述した健康の森公園内には複数の施設があるため、集客力を高めることにつながったと考えられる。

また、直売所については、当初予想を上回る利用があり、品目によっては一日3回の搬入でも間に合わず、収穫したものを急いで持ち込む出荷者も多かったという。こうして鮮度の良い農産物が店頭に並び、かつ安全・安



ファーマーズマーケット「はなまる市」

心な良質品の品揃えを徹底したことが利用者の信頼を高めたものと思われる。さらに、出荷者がパッケージや陳列を工夫するほか、直売所で利用者に野菜の選び方や調理方法などを直接アドバイスすることも支持を得た要因の一つに挙げられる。年間来場回数は全体平均で9.1回とリピート客が多く、なかには特定品目については特定の出荷者のものを選ぶ利用者もあるという。

一方、中長期的な課題は、直売所への出荷を担う生産者を今後いかに育成するかにある。60～70歳代が中心となっている現在の状況を考えると、農業を年金以外の副収入が得られる手段として位置づけ、定年後に就農してもらえるよう働きかけることが重要と捉えている。そのために「定年帰農者農業塾」などの開催を通じて、定年後の就農を呼びかけてきた。

げんきの郷では、パートタイマーを含め、およそ200名の社員が勤務している。地元農産物の消費拡大により農家所得の向上に寄与しているほか、雇用創出の面でも一定の役割を果たしており、地域経済に及ぼす効果は大きいと言えるだろう。

(きむら としづみ)